様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：２４１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ２０８２７

研究課題名（和文）認知症高齢者への看護に対する困難感と関連要因-急性期病院の看護師に焦点を当てて-

研究課題名（英文）Feeling of difficulty in providing nursing care for elderly people with dementia and related factors among nurses in an acute hospital

研究代表者
田端　真（TABATA, MAKOTO）

三重県立看護大学・看護学部・助手

研究者番号：２０７４６３５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：　急性期病院に勤務する看護師の認知症高齢者への看護に対する困難感の軽減に向け具体策を検討するため、急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感の因子を明確化し、関連要因を明らかにすることを目的に調査を行った。急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感は7因子構造であり、関連要因として、イメージ、コミュニケーションの理解、経験年数、研修の受講経験、認知症看護の責務、定期カンファレンス、環境の工夫等9項目が明らかとなった。急性期病院に特化した認知症看護の方法や環境への工夫の構築の必要性が示された。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to clarify factors related to feeling of difficulty when providing nursing care for elderly people with dementia in an acute hospital and causes related to this. It is necessary to consider countermeasures to reduce the feeling of difficulty. The feeling of difficulty in providing nursing care for elderly people with dementia by nurses in an acute hospital was determined using a 7-factor structured questionnaire. Nine items were clarified as factors related to feelings of difficulty and these included an image of elderly people with dementia, understanding of communication with dementia, years of nursing experience, participation in a training course of nursing care for dementia, obligation to provide nursing care for dementia, periodic conferences, and devising an environment. It was suggested that it is necessary to devise appropriate methods and construct a specialized environment for the provision of nursing care for dementia in acute hospitals.

研究分野：高齢看護学

キーワード：急性期病院　認知症高齢者　看護師　困難感　関連要因

１．研究開始当初の背景

現在わが国は、高齢者の割合が世界最高で、高齢社会への課題も見据えた取り組みが急がれる。その中のひとつに、認知症高齢者の課題が挙げられる。厚生労働省は、2015 年に「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）」を策定し、認知症高齢者への課題に対する施策は、国を挙げた社会全体の大きな課題となっている。

医療機関における高齢者の受療率は、高齢者が最も高く特に高齢者の入院加療における問題として、認知症が挙げられる。認知症高齢者は、個別性が高く介護者を含めた環境の影響を受けやすいため、看護師の介入が重要となる。しかし、急性期病院の看護に対しては、認知症看護に慣れていない看護師の困惑感や負担感を助長していることや、認知症看護に困難感を感じていることが指摘されている。また、先行研究で明らかにされた困難感に影響する要因については、様々な個人要因・環境要因が指摘されているに止まり、困難感との関連性を検証した研究はなされていない。

したがって、急性期病院に勤務する看護師の認知症高齢者への看護に対する困難感を構成する因子および関連要因を明らかにし、軽減や解消に向けた具体的な対策を検討することが重要となる。

２．研究の目的

本研究は、急性期病院に勤務する看護師の認知症高齢者への看護に対する困難感を構成する因子を明確化した上で、困難感に関連する要因を明らかにし、困難感の軽減に向けた対策の方向性を検討することを目的とする。

３．研究の方法

（1）対象

病床機能報告制度で用いられた「高度急性期機能」を有する病院を急性期病院とし、A 県内の急性期病院に勤務する看護師 1731 人を調査対象とした。

なお、看護師長、外来、手術室、集中治療室（ICU、CCU、NCU、SCU、HCU、NICU などが単独の病棟）、小児科、産科は除いた。

（2）期間

調査期間は平成 29 年 7 月～8 月とした。

（3）調査方法

対象となる病院を訪問し目的、方法などを説明、調査協力の同意が得られた病院に対して、質問紙一式を郵送した。調査は無記名自記式回答で行い、回答後の質問紙は、研究者あてに個別に郵送してもらう質問紙調査法をとった。

（4）調査項目

①基本属性

年齢、性別、看護師経験年数、現在の所属病棟、現在の所属病棟での年数など 9 項目。

②急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感

急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感については、測定するための既存の尺度などがないため、先行研究をもとに自己作成した質問項目 32 項目。「非常に思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」の 4 件法により尋ねた。

③個人特性

認知症に対する知識、認知症看護に関する研修を受けた経験、認知症看護に対する意識など 11 項目。

④環境要因

勤務体制、看護方式、人員や設備構造などのケア環境など 15 項目。

（5）分析方法

急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感として自己作成した質問項目は因子分析を行い、Cronbachα係数を算出した。

また個人要因、環境要因との関連を明らかにするため急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感の各因子の下位尺度の合計得点と個人要因、環境要因について t 検定を行った。さらに各因子の下位尺度の合計得点を従属変数、t 検定により有意差がみられた個人要因、環境要因を独立変数として重回帰分析を行った。

（6）倫理的配慮

情報の取り扱いについては、質問紙のデータは数値や記号などとして電子媒体へ入力し、鍵のかかる堅固な戸棚へ保管とした。調査協力は自由意思によること、協力しなくても何ら不利益は生じないことを説明し、配布方法としては個々のメールボックスなどへの一斉配布として強制力がかからないよう配慮した。調査は無記名自記式回答で行い、回答後の質問紙は、同封する返信用封筒に入れ研究者あてに個別に郵送してもらい、質問紙の返送をもって研究への同意が得られたものとした。

なお、本研究は、三重県立看護大学研究倫理審査会の承認および調査協力病院の倫理審査会の承認を得て実施した。また、既存尺度の使用は開発者の承諾を得た。

４．研究成果

（1）質問紙調査結果

質問紙の回収数は、711 人（回収率 41.1%）であり、回答に欠損のあるものを除外し、620 人（有効回答率 35.8%）を分析対象とした。

（2）急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感

急性期病院における認知症高齢者への看護に関する困難感について、天井効果が見られた１項目を除外した上で、31 項目について因子分析を行った。7 因子構造が妥当と判断し、主因子法プロマックス回転により因子負荷量の低い６項目を除外、25 項目を採用した。7 因子の累積寄与率は 50.2%であった。

抽出された 7 因子の因子ごとの Cronbach α係数は、第１因子 0.83、第 2 因子 0.79、第３因子 0.72、第４因子 0.75、第５因子 0.77、第６因子 0.72、第７因子 0.64、全体の Cronback α係数は 0.87 であった。

抽出された７因子の因子ごとに項目のまとまりから、それぞれ【認知症の疾患理解と症状対応】【認知症高齢者の安寧確保のためのアプローチ】【医師との連携】【認知症高齢者への個別的な看護の実施】【認知症高齢者の看護アセスメント】【看護師の陰性感情のコントロール】【認知症高齢者看護に対する葛藤への対処】と命名した。

（3）下位尺度と個人要因、環境要因との関連

t 検定の結果、第１因子は、認知症のコミュニケーションの理解をしていない、認知症評価スケールの理解をしていない、パーソン・センタード・ケアの理念を知らない、新オレンジプランの概要を知らない、認知症高齢者が入院すると症状が悪化すると思う、認知症高齢者のイメージがネガティブ、認知症高齢者が落ち着いて過ごすことができるような環境上の工夫ありにおいて有意に高かった（P＜0.05）。第２因子は、年齢平均以上、女性、看護師経験年数平均以上、現病棟経験年数平均以上、学歴４年未満、認知症のコミュニケーションの理解をしていない、パーソン・センタード・ケアの理念を知らない、新オレンジプランの概要を知らない、認知症高齢者が入院すると症状が悪化すると思う、認知症高齢者のイメージがネガティブ、パートナーシップナーシングシステムやペアでの担当制なし、認知症高齢者を見守りやすい施設構造だと思わない、日中に認知症高齢者を看護するのに適した人員だと思わないにおいて有意に高かった（P<0.05）。第３因子は、年齢平均以上、看護師経験年数平均以上、現病棟経験年数平均以上、認知症の疾患の理解をしていない、認知症のコミュニケーションの理解をしていない、新オレンジプランの概要を知らない、診療科の看護と同じくらい認知症看護を責務であるとは思わない、認知症高齢者のイメージがネガティブ、院外研修へのサポートなし、認知症高齢者を見守りやすい施設構造だと思わない、日中に認知症高齢者を看護するのに適した人員だと思わない、夜間に認知症高齢者を看護するのに適した人員だと思わない、認知症高齢者への看護に関する定期的なカンファレンスなし、認知症高齢者が落ち着いて過ごすことができるような環境上の工夫なし、病棟全体の認知症看護への意識なしにおいて有意に高かった（P<0.05）。第 4 因子は、年齢平均以上、看護師経験年数平均以上、認知症のコミュニケーションの理解をしていない、認知症看護に関する研修の受講経験あり、認知症高齢者が入院すると症状が悪化すると思う、認知症高齢者のイメージがネガティブ、認知症高齢者を見守りやすい施設構造だと思わない、日中に認知症高齢者を看護するのに適した人員だと思わないにおいて有意に高かった（P<0.05）。第 5 因子は、看護師経験年数平均以上、職位なし、認知症のコミュニケーションの理解をしていない、新オレンジプランの概要を知らない、認知症看護に関する研修の受講経験なし、認知症高齢者が入院すると症状が悪化すると思う、認知症高齢者のイメージがネガティブ、パートナーシップナーシングシステムやペアでの担当制なしにおいて有意に高かった（P<0.05）。第 6 因子は、病棟経験年数平均以上、職位なし、新オレンジプランの概要を知らない、認知症高齢者が入院すると症状が悪化すると思う、認知症高齢者のイメージがネガティブ、認知症高齢者を見守りやすい施設構造だと思わないにおいて有意に高かった（P<0.05）。第７因子は、年齢平均以上、看護師経験年数平均以上、職位あり、認知症看護に関する研修の受講経験あり、認知症高齢者のイメージがネガティブ、パートナーシップナーシングシステムやペアでの担当制なし、認知症高齢者を見守りやすい施設構造だと思わない、日中に認知症高齢者を看護するのに適した人員だと思わない、夜間に認知症高齢者を看護するのに適した人員だと思わない、認知症高齢者が落ち着いて過ごすことができるような環境上の工夫なし、病棟全体の認知症看護への意識なしにおいて有意に高かった（P<0.05）。

重回帰分析を行った結果、第１因子に有意に関連していたのはコミュニケーションの理解、イメージ、環境の工夫であった（P<0.05）。第 2 因子に有意に関連していたのは看護師経験年数、コミュニケーションの理解、イメージであった（P<0.01）。第 3 因子に有意に関連していたのは現病棟経験年数、認知症看護の責務、定期的なカンファレンス、病棟全体の認知症看護への意識であった（P<0.01）。第 4 因子に有意に関連していたのはコミュニケーションの理解、認知症看護研修の受講経験、イメージであった（P<0.01）。第 5 因子に有意に関連していたのはコミュニケーションの理解、イメージであった（P<0.001）。第６因子に有意に関連していたのは現病棟経験年数、イメージであった（P<0.001）。第７因子に有意に関連していたのは看護師経験年数、イメージ、病棟全体の認知症看護への意識（P<0.05）であった。

（4）困難感の軽減のための課題と方向性

急性期病院では、効率的に短期間で身体疾患に対する治療を提供する役割が最たるものであり、認知症高齢者に関する細かな情報を得る時間がないと推察される。さらに、認知症高齢者の身体疾患による身体症状などにより BPSD の悪化やせん妄を生じやすい状況にあることから、急性期病院における認知症高齢者への看護に対する困難感は、急性期病院であるがゆえに生じる特有の因子構造であると考えられる。急性期病院においては認知症の一般的なケア方法の普及だけではなく、急性期病院に特化した認知症高齢者への看護の方法や環境に対する工夫の構築をすすめていくことが重要である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　0 件）

〔学会発表〕（計　　1 件）
田端真：急性期における認知症高齢者看護への困難感に関する文献検討，日本老年看護学会第 23 回学術集会，2018．
〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
田端　真（TABATA MAKOTO）
三重県立看護大学・看護学部・助手
研究者番号：20746359

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）